

韻律／定型論の再興によせて 安田百合絵

短歌とは、それが拠って立つところの定型とは、一体何なのか。こうした疑問が（とりわけ若手歌人の間で）論じられることが多くなっている。「塔」四月号では浅野大輝が『「定型」っぽく読める』を考える（著者本人のブログで読める）、同人誌「羽根と根」では「定型と文体」という特集が組まれ、千種創一が「定型空母論」と題された評論を寄せるなどしている。藪内亮輔や阿波野巧也も「京大短歌」に定型論を書いており、韻律／定型論は一つのムーヴメントになっていると言っているいだらう。

各人の論を詳細に要約するだけの余裕はないが、むしろ、茂吉の「声調」から永田和宏や岡井隆まで数多の歌人が論じてきた点が、なぜ今こうして再燃しているのか、ということが気になる。

その原因のひとつには、やはり従来の五七五七七のリズムでは読めない歌の存在感が目立ってきたということがあるのだろう。

・1千円あつたらみんな友達にくぼるその僕のぼろぼろのカイ
ディガン 永井祐『日本の中でたのしく暮らす』

・おれをみるおれをわらえすつきりしろおれはレスラーだ技はあまり知らない
西崎憲『ピットとデシベル』

これらの歌については、いろいろな句切り方がありうるものの、五七五という従来の分節は不可能である。

さらに、千種も指摘するように、短歌を取り巻く環境自体が変

化しつつある。いわゆる短歌プロパーの人々は別として、歌集や雑誌の中だけでなくたとえはTwitterを通して短歌に出会い、オンラインでしか短歌を読む機会がないという人も一定数いる。

こうした要因によって短歌のありようが揺らいでいるのを、歌人たちは敏感に感じ取っているのだろう。そして、新しいものを排斥するというよりは、短歌をゆるやかに「困い込む」ことで、この詩形が溶解してしまわないよう、その存在を担保したい、という願いを、定型をめぐる議論からは感じとれるように思う。

個人的には、先ほど挙げたような大胆な破調の歌の意義は、定型のズレといった形式上の問題ではなく、短歌の限界を拡張することによる、新しい詩情の誕生という点にある気がしている。

それはまさに、フランスの散文詩が成し遂げたことでもある。ポードレルの『パリの憂鬱』が読み継がれているのは、それが韻文詩という型を壊したからではなく、定型を壊すことで韻文詩では作れなかった新たなボエジーを生み出したからである。

近年の議論では、破調の歌の短歌的読み方や、なぜそのような歌が生まれるのかという切り口で破調が論じられることが多いが、定型らしきものに回収することには、実はあまり意味はないのではないか。また定型が壊れたことに注目するだけでは十分ではない。破壊から何が生まれているのか、一首ごとにあるいは作家論的に丹念に読み解いてはじめて、豊かな収穫が得られよう。

もうひとつ、G・ジュネットの「パラテクスト」という概念も短歌の「困い込み」（定義付け）を考えるうえで意外と使えるのではないかと思う。短歌評論が物語論から学ぶべきことは決して少なくない。機会があればこれについても論じてみたい。